

第 11 回高木レクチャー

小林 俊行

2012年11月17日(土)～18日(日)に、東京大学数理科学研究科棟の大講義室において第11回「高木レクチャー」が行われました。会場には140人を超える参加者が集まり大盛況となりました。

2006年に始まった高木レクチャーは、本学理学部数学教室の教授であった高木貞治先生のお名前を冠した定期講演会です。今回の高木レクチャーは、日本数学会と東京大学大学院数理科学研究科が共催し、東大数理 GCOE のプロジェクト（リーダー：川又雄二郎教授）の協力で行われました。

第11回の高木レクチャーの講演者は、ペンシルベニア州立大学（アメリカ）のバウム教授、アインシュタイン研究所（イスラエル）のルボツキー教授、マギル大学（カナダ）のザイリンガー教授の3名でした。当日の受付では、各講演者からいただいた講演の予稿を製本した約100ページのブックレットが参加者に配布されました。

各招待講演者は次の講演タイトルで2回ずつレクチャーをされました。

バウム教授	「非可換幾何と局所ラングランズ予想」
ルボツキー教授	「ラマヌジャン複体と高次元エキスパンダーグラフ」
ザイリンガー教授	「冷たい気体のホットなトピックスー数理解物理的視点」



受付



オープニングスピーチ：宮岡教授

会場となった東大数理棟の大講義室では、講演者・参加者の方々の情熱と、「良いもの」を共有しようという思い、そして「高木レクチャー」の目指す「新しい数学の発展」を求める熱気の中、講演中も休憩時間も終始議論が交わされました。全講演が終了した11月18日（日）の夕方には、2階のコモン・ルームでワイン・パーティが開かれました。リラックスした雰囲気の中で新しい数学の創造があちこちで始まっていたのではないのでしょうか。

この高木レクチャーの準備と当日の運営にあたっては、京大 RIMS の小野薫教授、中島啓教授、当研究科の河東泰之教授、斎藤毅教授と私の5名の組織委員に加えて、日本数学会理事長でもある宮岡洋一教授、研究科長の坪井俊俊教授、さらに中川亜紀さん・吉村明日香さん・久光とも子さん・松本明子さん・三上福子さん・竹内愛さん・銀内純子さんや、ポストドク・大学院生など多くの方々に協力していただきました。日本数学会からは事務局の長谷川暁子さんも来てくださって、その活動が支えられました。



ルボツキー教授の講演の様子

講演の様子は麻生和彦助教・東正明さんらによる東大数理ビデオアーカイブス・プロジェクトチームの協力により撮影・記録され、ウェブ http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~toshi/takagi_video/ でまもなく公開される予定です。

高木レクチャーのホームページ : http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~toshi/takagi_jp/



バウム教授と森吉仁志教授 (名古屋大学)



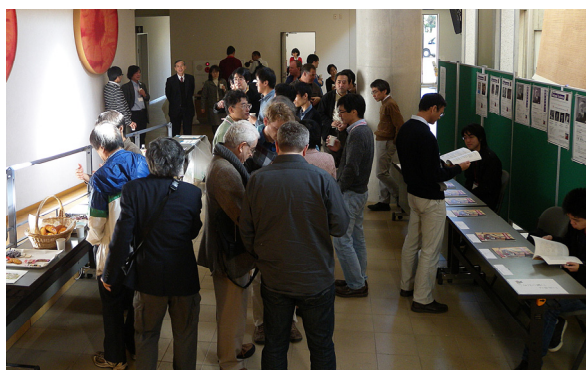
大島教授と坪井教授



第11回高木レクチャーと組織委員：
左からルボツキー、ザイリンガー、バウム、高木貞治(銅像)、
河東、小林、小野、中島、斎藤 (敬称略)



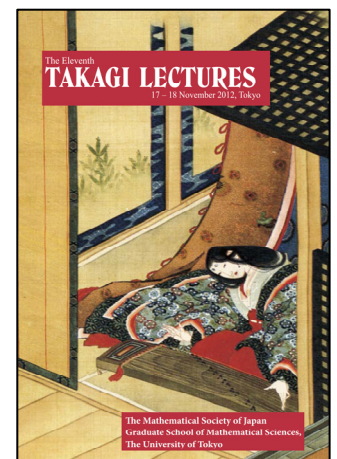
麻生助教と東氏



コーヒー・ブレイク



第11回ポスター



第11回高木ブックレット

【高木レクチャー】「日本の現代数学の父」と呼ばれる高木貞治の名を冠し、2006年11月に始まった。新たな数学の創造に寄与することを目的に、現代数学の最高峰の講演者を招いて年2回、春と秋に行われる。講演は、その分野の専門家に対してではなく、数学の広い分野の学生・研究者を対象に1時間×2回の形で行われる。

【高木貞治】1875-1960。数学者。東京帝国大学卒業後、23歳でドイツに留学。ゲッティンゲンで世界の俊秀たちに出会い、大きな刺激をうける。帰国後26歳で東大助教授となり、4年後に東大教授就任。代数的整数論の研究で『高木類体論』(1920)を発表、ヒルベルトらの類体の概念を一般化した。「数学のノーベル賞」といわれるフィールズ賞の第1回選考委員(1936年)として世界5人の中の1人に選ばれている。